

よつとすると、自分はまだあの少女の魔術にひつかゝつて、戀をしてゐるのかも知れない。  
(莫迦なッ。あんな小娘に……)  
彼は身體をひとゆすりゆすると、實驗衣のポケットへ、兩手をつつこんだ。ポケットの底に、堅いものが觸れた。

「ああ、桃枝から手紙が來てゐたつけ。」

今朝、小使が門のところで手渡してくれた四角い洋封筒をとりだした。發信人は「岡見桃助」と男名前であるが、それは桃枝の變名であることは、學校内で學士だけが知つてゐた。開いてみると、どうやらそれは彼女の勤めてゐるカフェ・ドランの丸卓子の上で書いたものらしく、洋酒の匂ひがしてゐた。文面は想像のとほり、彼の訪ねて來ないことを大變寂しがつてゐること、今夜にでも店の方にも、それともどつかで電話をかけて呼んで呉れば直ぐ飛んでゆくからといふやうな當人達でなければ讀んでゐるに耐へないやうな文句が縷々として續いてゐた。桃枝は學士の内妻に等しい情人だつた。彼は手紙を疊むと、ポケットへねちこんだ。

(今日はいつそのこと、仕事をよして、これから桃枝を引張り出しにゆかう。)

深山理學士が實驗衣を脱いで、卓子の上へボンと抛り出したときに、廊下にコツ／＼と聞き覺えた登音がして、白丘ダリアがやつて來た。

194 「先生、先生。」

扉をあけてやると、ダリアは兎のやうに飛びこんできた。

「先生濟みませんでした。急用が出來たものですから……」

「一體どうしたといふのです。」 深山理學士は桃枝のことなんか一時に吹きとばすやうに忘れてしまつて、眞剣な面持で聞いた。

「警視廳から呼ばれて、ちよつと行つたんですけれど……」

「なに、警視廳へ。」

「あたしのことぢやないんですけど、伯父が呼ばれたんで、あたしも附いてこいといふので行つてたんです。伯母さんが一週間ほど前に行方不明になつたんで、そのことで行つたんですよ。随分この事件、面白いのよ。ひとには云へないことなんです、ですけれど……」

ひとには云へないといひながら、白丘ダリアは、それこそ油紙に火のついたやうにべら／＼事件を喋り出した。

簡単に云ふと、失踪した伯母さんといふのは廿六歳になるひとだつた。伯父との仲も大層よかつたのに、一週間ほど前に急に行方不明になつてしまつた。遺書でもないかと調べたが、何一つ書きのこされなかつた。全く原因が不明だつた。

例の身許の知れぬ轢死婦人のことも、一度は問題になつたが、着衣も所持品も違つてゐた。といつて外に年齢の點で似合はしき自殺者もなかつた。生か死かも判然しなかつた。伯父は搜索につかれ切つて



半病人になつてしまつた。そこへ警視廳から重ねての呼び出しが来たので今朝、姪のダリアを介添へに櫻田門へ行つたといふのだ。

本廳では、伯父に對して、どんな些細なことでもよいから、夫人について腑に落ちかねることが今までにあつたならそれを話してみろといふことだつた。

伯父は暫く考へてゐたが、ボンと膝を打つた。

「さういへば思ひ出しましたが、妻の居るときに、妙な質問を私にしたことがありましたよ。江戸川亂歩さんの有名な小説に『陰獸』といふのがありますが、あの内容に紳商小山田夫人静子が、平田一郎といふ男から脅迫状を毎日のやうに受けとる件があります。その脅迫状の内容といふのは、小山田氏と静子夫人の夫婦としての夜の生活を、非常に詳細に書き綴つてあるのです。それは夫妻ならでは絶対に知ることのない内證ごとでした。それにも係らず、平田一郎といふ陰險な男は、一體どこから見てもるか、實に詳しく、實に正確に、夫婦間の祕事を手紙の上に暴露してある。——この脅迫状のことを、私の妻が突然話題にしたのです。江戸川さんの小説では、この氣味の悪い手紙の主は、實は平田とかいふ男ではなくて、小山田夫人静子その人だつた。夫人の變態性がこの手紙を書かせ、夫との夜の祕事に異常な刺戟を與へたといふのでした。——私の妻は、最後にこんなことを訊いたことを覚えてゐます。『このやうな脅迫状が、静子さん自身の手によつて書かれたわけなら静子さんは別に何とも恐ろしくはなかつた筈です。しかしもしあの手紙が、本當に見も知らない人の手によつて書かれたものだつたとしたら

静子夫人の駭きは、どんなだつたでせうね」と、まあこんな意味のことを云つたことがあります。私は莫迦なことを云ひだす奴ぢやのうと、笑つてやつたんです。しかし今となつて思へば、あれも失踪の謎をとく一つの鍵のやうな氣がしてなりません。」

係官は、伯父の話に大變興味をもつたやうだつた。二人がもう席を立たうといふときに一人の警官が圓い小箱をもつて来て、これに何か見覚えがないかと差し出した。それは茶色の硝子層のやうなものであつた。勿論二人には思ひもよらぬ品物だつた。

「こんなになつてゐるから判らないかもしれないが」と其の警官が云つた。「これは映畫のフィルムなんです。しかもそのフィルムが燃焼を始めたのを急にもみ消したとでも云ひませうか、フィルムの燃え層なのです。それでも心當りがありませんか。」

それは二人にとつて更に見當のつかないことだつた。話はそれまでとなつて、白丘ダリアと伯父とは、警視廳を辭去した、といふのであつた。

「一體その伯父さんといふのは、何といふ方なのかネ。學士が尋ねた。

「黒河内尙綱といふ是れでも子爵なのです。伯母の子爵夫人といふのは、京子といひました。」

「黒河内京子——君の伯母さんか。」

「先生、伯母をご存じますの。」

「なアに、知るものかネ。學士は強く首を左右に振つた。「さあ、今日は遅れたから、急いで組立てにと



りかゝらう。」  
さういつて深山理學士は實驗衣を拾ひあげると、洋服の袖をとほした。そのときポケットから、四角い封筒がパタリと床の上に落ちたのを、學士は氣付かなかつた。  
ダリアの眼は悪戯者らしく爛々と輝いた。太い腕が、その封筒の方へニユーツと延びていつた。

「赤外線男といふものが棲んでゐる！」

途方もない『赤外線男』の存在を云ひ出したのは、外ならぬ深山理學士だつた。それは苦心の赤外線テレヴィジョン装置が組上つてから二日ほど後のことだつた。

大膽といはうか、氣狂ひじみたといはうか、深山理學士の發表に駭いたのは、學界の人達ばかりだけではなかつた。逸早く帝都の諸新聞紙はこの發表をデカ／＼の活字で報道したものだから、知ると識らざるとを問はず、どこからどここの隅々まで、一大センセーションが颯風の如く捲きあがつた。

「赤外線男といふものが棲んでゐるさうだ。」

「そいつは、わし等の眼には見えぬといふではないか。」

「深山理學士の何とかといふ器械で見ると、確かに見えたといふではないか。」  
などと、人の噂さは千里を走つた。

なにが『赤外線男』だ？

深山理學士の言ふところによれば斯うだ。

「予は豫て學界に豫告して置いた赤外線テレヴィジョン装置の組立てを、此の程完成した。これは普通のテレヴィジョンと殆んど同じものだが、變つてゐる點は、赤外線だけに感ずるテレヴィジョンで、可視光線は装置の入口の黒い吸収硝子で除いて、装置の中には入れない。だから徹頭徹尾、赤外線しか映らないテレヴィジョンである。」

「予はこの装置の完成するや、永い間の欲望を何よりも早く達したいものと思ひ、装置を使つて、研究所の運動場の方面を覗くことにした。折から夕刻だつた。肉眼では人の顔も仄暗くハッキリ見別けのつかぬやうな状態であつたが、この赤外線テレヴィジョンに映るものは、殆んど白晝と變らない明るさであつた。それは太陽の残光が多量の赤外線を含んで、運動場を照してゐるせるに違ひなかつた。勿論畫面の調子から云つて、吾人が既に充分に知つてゐる赤外線寫眞と同じで、たとへば樹々の青い葉などは雪のやうに眞白にうつつて見えた。なんとといふ驚くべき器械の魅力であるか。」

「しかしこれは眞の驚きではなかつた。後になつて予を發狂に近いまでに驚倒せしめるものがあらうとは、今日の今日まで考へたことがなかつた。それは實に、吾人がいまだ肉眼で見たことのなかつた不思議な生物が、その器械によつて發見されたことである。それは確かに運動場の上をゴソ／＼と匍ひまはつてゐた。予は眼のせりではないかと、器械から眼を離し、肉眼でもつて運動場を見たが、そこにはそ



の影もない。これはと思つて、赤外線テレビジョン装置を覗いてみると、確かに運動場のテニスコートの棒ぐひの傍に、動いてゐるものがあるのだ。その内に、彼の生き物は直立した。それを見ると驚くべし人間である。しかも日本人の顔をした男である。背は相當に高い。がっちり肥えてゐる。なんか眞黒な洋服を着てゐるやうだ。鳥渡悪魔のやうな、また工場の隅から飛び出してきた職工のやうな恰好である。それほどアリ／＼と眺められる人の姿でありながら、一度元の肉眼にかへると、薩張り見えない。赤外線でない一向に姿の見えない男——といふところから、予はこの生物に『赤外線男』なる名稱をつけたと思ふ。

「しかし残念なことに、やがてこの『赤外線男』はこつちに気がついたものと見え、キツと齒をむいて怒つたやうな顔をしたかと思ふと、ツツ一つと逸走を始めた。そしてアレヨ／＼と云ふ裡に、視界の外に出てしまつた。駭いてテレビジョン装置のレンズを向け直したが、最早駄目だつた。しかし兎も角も、予は初めて『赤外線男』の棲んでゐることを知つた。われ等人間の肉眼では見えない人間が棲んでゐるとは、何といふ駭くべきことだ。そしてまア、何といふ恐ろしいことだ。」

深山理學士の發表は大體こんな風の意味のものだつた。

『赤外線男』といふ名詞で、一つの流行語になつてしまつた。帝都の市民は、この『赤外線男』が今にも自分の身近かに現はれるかと思つて戦々慄々としてゐた。

そのうちに、ポツ／＼『赤外線男』の仕業と思はれることが、警視廳へ報告されて來るやうになつ

た。

郊外の文化住宅の卓子の上に、温く湯氣の立ち昇る紅茶のコップを置かせてあつたが、主人公がさア飲まうと思つてその方へ手を出すと、これは不思議、紅茶が半分ばかり減つてゐた。これはきつと『赤外線男』が忍びこんでゐて、グーツとやつたんだらうといふやうな話もあつた。

ギンザ、ダンスホールの夜更け、ヂヤズに囃されて若き男と女とが踊り狂つてゐる。そのときアブレて、壁際の椅子にしよんぼり腰をかけてゐた稍々年増のダンサーが、キヤーツと悲鳴をあげると何ものかを拂ひのけるやうな恰好をし、駭いてダンスを止めて駈けよる人々の腕も待たず、パツタリ床の上に仆れてしまつた。ブランドーを與へて元氣をつけさせ、さてどうしたのかと尋ねてみると、彼女が椅子にかけてゐるとき、何者とも知れず急にギユツと身體を抱きすくめた者があつたといふのだ。目を瞠つてゐるが、人影も見えない。それなのにヒシ／＼と肉體の上に壓力がかかつてくる。これは赤外線男に抱きつかれたんだと思ふと急に恐ろしくなつて、あとは無我夢中だつたといふ。——何が幸になるか判らないもので、『赤外線男』に抱きつかれたダンサーといふので、いままでアブレ勝ちだつたのが急に流行つ兒になつて、シートがぐんぐん上へ昇つていつた。

かうなると何事も、暗闇だからといつて安心してするわけにはゆかなかつた。何時赤外線男にアリと覗かれてしまふか知れなかつたのである。

これに類する報告は、日一日と殖えていつた。しかし赤外線男のすることが、この邊の程度なら、



それは悪戯小僧又は軽い痴漢みたいなもので、迷惑ではあるけれど、大して恐ろしいものではない。いやひよいとすると、それ等の小事件は赤外線男に對する疑心暗鬼から出たことで、本當の赤外線男の仕業ではないのぢやないか。或ひは赤外線男といはれるものも、深山理學士の錯覺であつて始めから赤外線男なんて、居ないのぢやないか。こんな風に、赤外線男に對する期待外れを口にする人も少くはなかつた。

たがしかし『赤外線男』否定黨が大きな顔をしてゐられるのも、永い時間ではなかつた。ここに突如として赤外線男の魔手は伸び、帝都全市民の面は紙のやうに色を喪つて、『赤外線男』恐怖症に罹らなければならなくなつた。——それは赤外線男発見者の深山理學士の研究室が不可解な襲撃をうけたことだつた。

これは午前二時前後の出来ごとだつたけれど、警視廳へ報告されたのはもう夜明けの五時頃だつた。場所が場所であるし、赤外線男の噂さの高い折柄でもあつたので、直ちに幾野捜査課長、雁金檢事、中河豫審判事等係官一行が急行した。

取調べの結果、判明した被害は、深山研究室の扉が破壊せられ、あの有名な赤外線テレヴィジョン装置が滅茶々に壊されてゐるばかりか、室内のあらゆる戸棚や引出しが亂雑に掻き廻され、あの装置に關する研究記録などが一枚のこらず引裂かれてゐるといふひどい有様だつた。

襲撃されたところは、もう一ヶ所あつた。それは深山研究室に程近い研究所の事務室だつた。ここで

も同じやうな狼藉が行はれてゐるのみか、壁の中に仕懸けられた額のうしろの隠し金庫が開かれ、現金千二百圓といふものが盗まれてしまつた。

さて當の深山理學士は、當夜例のとほり、研究室内に泊つてゐた筈だが、どうしてゐたかと云ふと、赤外線男のために、もろくも猿轡をはめられ兩手を後に縛られて、室内にあつた背の高い變壓器のつぺんに抛りあげられて、パジャマ一枚で震へてゐた。これを発見したのは係官の一行だつた。

「この事件を眞先に発見したのは、誰かネ。」  
と幾野捜査課長は、走せ集つた研究所の一同を見廻はしていつた。

「儂でございます。」年寄の小使が云つた。「儂は毎晩研究所を見廻はつてゐる役でございます。」

「発見當時のことを残らず述べてみなさい。」  
「あれは午前二時頃だつたかと思ひますが、見廻はりの時間になりましたので、懐中電燈をもつて、夜番の室から外に出ようと思つた時、氣のせるか、どつかで物を壊すやうなゴト／＼パリ／＼といふ音が

します。どうやら深山研究室の方向のやうに思ひました。これは火事でも起つたのかと思ひ、戸口を開けて闇の戸外へ一步踏み出した途端に、脾胃をドスンと一つきやられて、その儘何もかも判らなくなり

ました。大變寒いので氣がついてみますと、もう夜は明けかかり、儂は元の室の土間の上に轉がつてゐるといふ始末。それから駭いて窓から外へ飛び出すと、門衛のゐますところまで駈けつけて、大變だと喚きましたやうなわけです。」



「すると、お前が脾胃をやられたとき、何か人の形は見なかつたか。」

「それが何にも見えませんでした。ごさいました。」

「序に聞くが、お前は赤外線男といふのを聞いたことがあるか。」

「存じて居ります。昨夜のあれは、赤外線男でございましたか。老人は急に臆気がついてブルブルへ出した。」

課長は、小使を下げると、今度は深山理學士を呼び出した。

「昨夜、貴方の襲撃された模様をお話し下さい。」

「どうも面目次第もないことですが。」と學士はまづ頭を掻いて「何時頃だつたか存じませぬが、研究室のベッドに寝てゐた私は、ガタリといふかなり高い物音に不圖眼を醒してみますと、どうでせうか。室の入口の扉の上半分がポツカリ大孔が明いてゐます。これは枕許のスタンドを點けて寝るものですから、それで判つたのです。私は吃驚して跳ね起きました。すると、あの赤外線テレビジョン装置がグラグラと獨り手に揺れ始めました。オヤと思ふ間もなく、装置の蓋が呀ッといふ間もなく宙に舞ひ上り、ガタンと床の上に落ちました。私が呆然としてゐますと、今度はガチャーンと物凄い音がして、あの装置が破裂したんです。真空管の破片が飛んできました。大きな廻轉盤が半分ばかりもげて飛んでしまふ。つづいてガチャーンと大きなレンズが壊れて、頑丈なケースが、薪でも割るやうにメリメリと引裂かれる。私は膽を潰しましたが、ひよつとすると、これはこの装置で見たことのある赤外線男ではな

いかしらと考へると、ゾーツとしました。見る可からざるものを視た私への復讐なのではないかしらと思ひました。私はソツと逃げ出し、室の隅ツこにでも隠れるつもりで、寢床から滑り下りようとするところを、ギョツと抱きすくめられてしまひました。それでゐて身の周りには何の異變もないのです。しかし身體の自由は失はれて、恐ろしい力がヒシ／＼と加はり、骨が折れさうになるので、思はず『痛い、助けて呉れ』と怒鳴りました。ところがイキナリ、ガーンと頭へ一撃くつてその場へ昏倒してしまつたのです。それから途中、全然記憶が缺けてゐるのですが、イヤといふほど横ッ腹に疼痛を覺えたので、ハツと氣がついてみますと、私は妙なところに載つてゐるのです。それが先刻、皆さんから降ろしていただいたあの背の高い變壓器の上です。口には猿轡を噛ませられ、手は後に縛られ、立ち上ることも出来ない有様です。下を見ると、これはどうでせう。奇々怪々な光景が悪夢のやうに眼に映ります。實驗戸棚の扉が、風にあふられたやうに、バターンと開く、すると棚に並べてあつた澤山の原書が生き物のやうにポーンボンと飛び出してきては、床の上に落ちる。引出しが一つ一つ、ヒョコ／＼脱け出して飛行機の操縦のやうなことをすると、中に入つてゐた洋紙や藥品の小壘などが、花火のやうに空中に亂舞する。いやその化物屋敷のやうな物凄い光景は、正視するのが恐ろしく、思はず眼を閉ぢて、日頃唱へたこともなかつたお念佛を口誦んだほどでした。」

理學士は、そこで一座の顔を見廻はしたが、憐愍を求めやうに見えた。

「それから、どうしたです。課長は尙も先を促した。」



「それからです。室内の騒ぎが少し静まると、こんどは、壊れた戸口がガタ／＼と鳴りました。何だか廊下に蹠音がして、それが遠のいてゆくやうに聞えました。すると間もなく、向うの方で大きな響がしはじめました。掛矢でもつて扉を叩き割るやうな恐ろしい物音です。それは今から考へてみますと、どうも事務室の入口のやうに思はれました。その物音もいつしか消えて、こんどは又別の、ゴトン／＼といふ音にかはり、何となく小さい物を投げつけてゐるやうに思ひましたが、それも五分、十分と経つうちに段々静かになり、聽て何にも聞えなくなりました。私は赤外線男がまた此の室へ引返してくるのではないかと、氣も魂も消し飛ばしてガタ／＼慄へてゐましたが、幸にもその後、別に異變も起らず、やつと我れに返つたやうなわけでした。いや何と申してよいか、あのやうに恐ろしいと思つたことはありませんでした。」

さういつて深山理學士は、大きい溜息をついたのであつた。

「君は、そのとき、何か扉の閉るやうな物音をききはしなかつたかネ。」と課長が尋ねた。

「さうです。さういへば、蹠音らしいものが空虚な反響をあげて、トン／＼と遠のくやうに思ひましたが、別に扉がギーツと閉まる音は氣が付きませんでした。」

「ふふん、それはどうも……。」課長は低く呻つた。

「どうでせうか、ちよつとお尋ねしますが、」と事務員の一人がオツ／＼と進み出でた。今の深山先生のお話では、赤外線男が、この建物から扉を閉めて出て行つた様子がございせんが、さうしますと、

赤外線男はまだこの建物の中でウロついてゐるのでございませうか。」

「そりや判らんね。」と太つた刑事が云つた。「この邊にウロ／＼してゐるかも知れないが、また一方から考へると、赤外線男が建物から出てゆくときにや、別に所長さんに叱られるわけではないから、君のやうに必ず扉をガタンと閉めてゆくとは限らないからナ。」

そのとき一人の刑事と何か囁き合つてゐた雁金検事が、捜査課長の肩をつつついた。

「君、一つ發見したよ。この室の戸棚の隅に大きな靴の跡があつたよ。」

「靴の跡ですか。」

「さうだ。これはちよつと變つてゐる大足だ。無論、深山理學士でもないし、またこれは男の靴だから、この室のダリア嬢のものでない。寸法から背丈を計算して出すと、どうしても五尺七寸はある。それからゴムの踵の摩滅具合から云つてこれは血氣盛んな青年のものだと思ふよ。」

「検事さん、待つて下さい。」と捜査課長は慌て氣味に云つた。

「その足跡は果して犯人のせうかどうでせうか。」

「それは勿論、いまのところ戸棚の隅にあつたといふだけのことさ。」

「それにですな、赤外線男といふのは、眼に見えない人間なんぢやないですか。その見えない人間が、足跡を残すといふのは滑稽ぢやないでせうか。」

「しかし君。」と検事も中々負けてはゐなかつた。「深山君の報告によると、赤外線男はこの運動場を人



間のやうな恰好して歩いてゐたといふぞ。してみれば、赤外線男とて、地球の重力をうけて歩いてゐるので、空中を飛行してゐるわけではない。だから身體は見えなくても、大地に接するところには、赤外線男の足跡が残りにやならんと思ふよ。」

「足跡が見えるなら、靴も見えたつていゝでせう。すくなくとも、靴の裏は見えたつていゝわけです。そこには我々の眼に見える泥がついてゐるのですからネ。」

課長と検事とは喋つてゐながらも、この難問題が自分たちの畠ではないことに氣がついた。

「ねえ、君」と検事が鼻に小皺をよせて囁くやうに云つた。「これはどうも俺たちの手にはおへないやうだよ。第一、知識が足りない。」

「さうですよ。」と課長も苦笑した。

「仕方がないから、これは一つ例の男を頼むことにしてはどうかネ。帆村莊六をサ。」

「帆村君ですか。實は私も前からそれを考へてゐたのです。」

二人の意見は直ぐに纏つた。そして新に呼び出されるべき帆村莊六といふ男。これはご存じの方も少くはないと思ふが、素人探偵として近頃賣り出して來た青年で、科學の方面にも相當明るいといふ人物だつた。

かうして取調べも一通り終り、報告書も作られたけれど、直接の被害の中にたうとう洩れてしまつた一つの重大なる品物があつた。それは深山理學士が戸棚の中に秘藏してゐた或る品物だつたが、彼はそれを保官に報告しなかつた。それは決して忘れたわけではなくて、故意に學士の心に秘めたものと思はれる。一體、その品物はどんなものだつたか。

とにかく深山學士研究室の襲撃事件によりて、赤外線男の正態といふものが、大分はつきりしてき

帆村探偵を交ぜた係官の一行が、深山理學士の研究室を訪ねたのは、新しい赤外線テレビジョン装置が出来上つたといふ其の日の夕刻のことだつた。折角作つた一臺は、無慘にも赤外線男の破壊するところとなり、學士も助手の白丘ダリアも大いに失望したが、その筋の希望もあつて、二人は更に設計をやり直し、新しい装置を晝夜兼行で組立てたのだつた。白丘ダリアは、この事件以來といふものは、住居にしてゐる伯父黒河内子爵のところへ歸つてゆくことをやめ、深山研究室の中にベッドを一つ置き、學士と共に寝起きすることとなつた。殊に睡眠時間もとらないでこの組立に急いだ結果、四日といふ短い日数のうちに、新しい第二装置ができあがつた。しかし學士はあの事件以來、何とはなく大變疲れてゐるやうであつた。その一方、白丘ダリアは益々健康に輝き頸から胸へかけての曲線といひ、腰から下の飛び出したやうな肉塊といひ、まるで張りきつた太い腸詰を聯想させる程だつた。従つて第二装置の素晴らしい進行速度も、ダリアの精力に負ふところが多かつた。



研究室の扉をコツ／＼と叩くと、直ぐに應へがあつた。入口が奥へ開かれると、そこへ顔を出したの  
は、頭に一杯繻帯をして、大きな黒眼鏡をかけた若い女だつた。先登に立つてゐた課長は、  
(これは部屋が違つたかな)  
と思つた位だつた。

「さあ、皆さんどうぞ。」

さういふ聲は、紛れもなく白丘ダリアに違ひなかつた。どうしてこんな繻帯をしてゐるのだらう。そ  
れに黒眼鏡なんか掛けて……と不思議に思つた。

一行中の新顔である帆村探偵が、深山理學士と白丘ダリアとに、先づ紹介された。

「いや、ダリアさんですか、始めまして」と帆村は慇懃に挨拶をして「その繻帯はどうしたんです。」と  
尋ねた。

課長はこの場の様子を見て、いつもながら帆村の手廻しのよいのに呆れ顔だつた。

「これですか。」少女はちよつと暗い顔をしたが、「すこしばかり怪我をしたんですの。繻帯をしてゐます  
ので大變にみえますけれど、それほどでもないのです。」

「どうして怪我をしたんですか。」

「いゝえ、アノ一昨晩、この部屋で寝てゐますと、水素乾燥用の硫酸の壺が破裂をしたのです。その拍  
子に、棚が落ちて、上に載つてゐたものが墜落して来て、頭を切つたのです。」

「そりや大變でしたネ。眼にも飛んで来たわけですか。」

「何しろ疲れてゐたもので、直ぐ起きようと思つても起き上げれないのです。先生は直ぐ駈けつけて下さ  
いましたけれど、あたくしが、愚圖々々してゐるうちに、頭髮についてゐた硫酸らしいものが眼の中へ  
流れこんだのです。直ぐ洗つたんですが、大變痛んで、左の眼は殆んど見えなくなり、右の眼も大變弱  
つてゐます。」

ダリアは黒眼鏡を外して見たが、左眼はまるで茹でたやうに白くなり、さうでないところは眞赤に充  
血してゐた。右の眼はやゝ充血してゐる位でまづ無事な方であつた。

「全く危いところでしたよ。連日の努力で、もう身體も頭脳も疲れ切つてゐるのです。神経ばかり、高  
ぶりましてネ。」と理學士も側へよつて来て述懐した。彼の眼の色も、さういへば尋常でないやうに見  
えた。

「もすこして、どうかになるところでしたわ。さうだつたら、今日は實驗を御覽に入れられませんでした  
でせう。」

ダリアは獨り言のやうに云つた。

一同は此の室に何だか唯ならぬ妖氣が漂つてゐるやうな氣がした。

「ちや、いよ／＼働かせて見ます。」と深山學士は立ち上つた。「白丘さん。カーテンを閉めてすつかり暗  
室にして呉れ給へ。」



「はい、畏りました。」

ダリアは剽合に元氣に窓のところに歩みよつては、ボタン／＼と蝶番式にとりつけてある雨戸を合はせてピチンと止め金を下ろし、その内側に二重の黒カーテンを引いていつた。窓といふ窓がすっかり閉つてしまふと、室内には桃色のネオン燈が一つ、薄ボンヤリと器械の上を照らしてゐた。隅によつてゐた幾野捜査課長、雁金検事、中河豫審判事、帆村探偵、それから本廳の警部一名と刑事が二名、もう一人事件の最初に出て來た警察署の熊岡警官と、これだけの人間が燈の下へゾロゾロと集つてきた。

「これは君、暗いネ。」課長はすこし暗さを氣にしてゐた。

「何だか、頭の上から壓へられるやうだ。」さういつたのは白髪が多い中河豫審判事だつた。

「このネオン燈も消します。さうしないと巧く見えないのです。」深山が云つた。「しかしスウキツチは、ここにありませんから、仰つて下されば、いつでも點けます。」

「待つてくれ、待つてくれ。」と雁金検事が悲鳴に近い聲をあげた。「どこに誰があるやら判らないぢやないか。よおし、諸君はとりあへずこつちに立つてゐて呉れ給へ。僕たちは、この椅子に腰をかけてゐることにしよう。」

幹部だけが、スクリーンを包圍して、椅子に席をとつた。

「いゝですか。」





パツとネオン燈は消えた。すると一尺四角ばかりのスクリーンの上に、朧氣な映像があらはれた。

「馬鹿に暗いネ。」と課長が云つた。

「ピントが外れてゐるのです。増幅器もまだうまいところへ調整がいつてゐません。直ぐ直つてきます。」

なるほど映像はすこし明瞭度を加へた。テニスコートの棒くひや審判臺らしいものが見える。そこへ人影らしいものが。

「人間が通つてゐるぞ。」課長が叫んだ。「早く肉眼で運動場を見せ給へ。」

「これは、こつちのレンズからお覗き遊ばして……」捜査課長の耳許でダリアの聲がした。

「呀ッ。」と課長は慌てたが「いやなるほど、よく見えます。——なあーんだ、例の小使が本當に通つてやがる。」まづ赤外線男ではなかつたので安心した。

「この邊のところですから、さあ誰方も代りあつてスクリーンを覗いて下さい。」理學士が器械から離れながら云つた。

「さあ順番に見ようぢやないか。」検事が後の方から聲をあげた。

ゴトリ／＼と靴音がして、スクリーンの前に観察者が入れ代つてゐるやうだつた。

「どうも赤外線寫眞といふものは、色の具合が、死人の世界を覗いてゐるやうだな。」判事さんが呟きながら視てゐる。

そのとき眞暗だつた室内へ、急／＼たる白光がさし込んだ。

「呀ッ！」

「どツどうしたんだ。」理學士が叫んだ。

一つの窓のカーテンが、サーツとまくられたのだつた。皆の眼は、この眩しい光に會つてクラ／＼とした。

「いゝえ、何でもないので。失禮しました。」と窓のところでダリアの聲がした。

「困るぢやないか。」深山は云つた。

「アノちよつと何だか、あたしの身體になんだか觸りましたのよ。吃驚して、窓をあけたんですの。」

「ああ、もう出たかッ——」

「赤外線男！」

「窓を皆、明けるッ！」

そのとき白丘ダリアは朗らかな聲で云つた。

「いゝえ、大丈夫ですわ。カーテンを明けてみましたら、帆村さんのお臂でしたわ。ホホホ。」

「なあーんだ。」

一座はホツと溜息をついた。

「ぢや早くカーテンを下ろしなさい。」



「済みません。」

カーテンはバタリと下りた。元の暗闇が歸つて来たけれど、皆の網膜には白光が深く浸みこんでゐて、闇黒がぼんやり薄明るく感じた。スクリーンの前では雁金検事が、しきりに眼をしばたいたゐる。ウームといふやうな低い呻り聲が聞えたと思つた。ドタリ……と、大きな林檎の箱を仆したやうな音が、それに續いて起つた。

素破、異變だ！

「どツどうした。」

「まッ窓だ窓だ窓だッ。」

「ランプ、ランプ、ランプ！」

さーツと、窓から白光が流れこんだ。ネオン灯もいつの間にか點いた。

「キヤーツ」と喚いてカーテンに縋りついたのは、窓のところへ駆けよつたばかりの白丘ダリアだつた。床の上には、幾野捜査課長が土のやうな顔色をし、兩眼を剥きだし、口を大きく開けて仆れてゐた。

もう赤外線テレビジョンも何にもなかつた。窓といふ窓は明け放された。室内の一同の顔には生色がなかつた。

「赤外線男！」

「ああ、あいつの仕業だ。」

いまにも自分の身體に、赤外線男の猿臂がムツと觸れはしないかと思ふと、恐ろしい戰慄が電氣のやうに全身を走つた。眼に見えない敵！ そいつをどう防げばいゝのだ。どうして其の魔手から遁れられぬのだ。

そのとき帆村探偵は、一人進み出て、捜査課長を抱へ起した。課長の頭は、ガツクリ前へ垂れた。

「呀ッ、こりや非道い！」

帆村は呟いた。幾野課長の頸の眞うしろに一本の銀鍔がブスリと刺さつてゐた。

一同は吾れにかへると、赤外線男のことを鳥渡忘れて、課長の死骸の周圍に駆けあつまつた。

「延髓を」と突きにやられてゐる……。」

「太い鍔だッ。」

「指紋を消さないやうに、手帛でも被せて抜けッ。」

「これは抜けましますまい。」と帆村が云つた。  
なるほど、力の強い刑事が引張つても抜けなかつた。鍔に筋肉が搦みついてしまつたものらしい。

「一體これは、どうして調べようか。」判事が當惑の色をアリ／＼と現はして云つた。  
「どうも、相手が悪い。」と検事が呟いた。

「赤外線男はそれとして置いて、普通の事件どほり、この部屋の中にある者は、すつかり取調べることにして下さい。」と帆村が云つた。



そこで係官が代りあつて係官自身と、帆村、深山理學士、白丘ダリアとを調べてみたが、別に怪しい點は何一つ發見されなかつた。  
結局、赤外線男の仕業といふことが裏書きされたやうなものだつた。流石の帆村探偵も手も足も出せなかつた。

捜査課長の殺害事件は、俄然日本全國の新聞紙を賑はした。それと共に、赤外線男の噂が一段と高まつた。警視廳の無能が、新聞の論説となり、投書の機關銃となり、總監をはじめ各部長の面目はまるつぶれだつた。

四谷に赤外線男が出た。三河島にも赤外線男が現はれたと、時間と場所とを辨へぬ出現ぶりだつた。尤もそれは皆が皆、本當の赤外線男とは思へず、一寸話を聞いただけで偽赤外線男だと看破出来るやうなものもあつた。

帆村探偵は、直接に攻撃されはしなかつたけれど、内心大いに安からぬものがあつた。彼は書齋のソファに身を埋めると細巻のハバナに火を點けて、ウツトリと紫の煙をはいた。彼は元々赤外線男などといふ不思議な生物があるとは信じてゐなかつた。しかしそれには別に根據があるわけではなかつたのだ。捜査課長の故幾野氏の慘死事件を考へてみるのにはあれは赤外線男なら勿論出来ることであるが、

それと同時にあの部屋にゐた人間にも出来ることではないかと思ひかへしてみた。

雁金檢事、中河判事——この二人は、まづ犯人ではないであらう。彼等の本廳に於ける歴史も功績も

古く大きいものだ。

警部、刑事も疑へば疑へないこともないが日頃知つてゐる仲だから先づ大丈夫。

熊岡警官はどうだ。これは始めて會つた人ではあるが、Y署では模範警官といはれてゐるから大丈夫だらう。但しいろいろと探偵眼のあるところが、平警官として多少氣に入らないこともないが、一々疑つてはきりがない。

残るは深山理學士だ。これは確かに怪しくてもいゝ人物だ。しかし彼は赤外線男を見たといふ。赤外線男が二人もあるなら格別、一人なら彼の嫌疑は薄い。ことに彼は赤外線男に襲撃され、變壓器の上に抛り上げられてゐた被害者でもある。感心しない。

然らば白丘ダリア嬢はどうだ。「赤外線男」といふからには、ダリア嬢では性別が違つてゐる。男が女装してゐるものとはあの潑刺たる肉體美から云つて信じられない。殊に課長がやられた日には、眼を悪くしてゐた。あのやうに視力の弱つてゐるのに、延髓を刺すといふやうな精密正確を要することが出来るであらうか。

いや凡そ、あの部屋にゐた連中は皆、闇黒の中に沈没してゐたのだ。誰も視力を奪はれてゐた。暗闇で延髓を刺すといふことは、誰にも出来ない筈だ。



残る嫌疑者は自分であるが、これとても同じことが云へる。然らば、誰が課長を殺したか？

ああ、赤外線男！ 貴様はやつぱり存在するの。貴様でなければ、あの殺人は出来ないことにはなるが、貴様は一體何者だツ。

帆村は呻りながらも、まだ何か忘れてゐるものがあるかと思ふと痛む頭腦をふり絞つた。有るには有る。あの延髓を刺した鉞だ。調べてみると指紋はあつた。しかし細い鉞の上のつた幅のない指紋なんて何になるのだ。

それから、深山理學士の室で発見された大きい靴跡だ。あれが赤外線男のものとして、背丈を出すと五尺七寸位。これはいゝ。

次に事務室で盗まれた千二百圓だ。赤外線男に金が入るとは可笑しい。しかし靴を履いてゐたり、黒い洋服のやうなものを着てゐるといふからには、矢張り金が必要のかしら。しかし、その金をどうして使ふのだ。彼自身が握つてゐたのでは金は他人の眼に見えないだらうし、第一洋服店の前に立つて、洋服を注文したところで、背丈肉付もわからなければ、店の方でも聲ばかりするのは驚いて、不思議な噂話がパツと擴がらねばならぬ。それも聞えてこないといふのは、若しや赤外線男に手下があるのではあるまいか。

世間では、新宿のホームから飛びこんで轢死した婦人の身許もわからないし、地下に葬つた筈の死骸

が紛失した不思議さを、今も尙覺えてゐて、あれも赤外線男の仕業だらうと云つてゐるやうだ。死骸を奪つたのが赤外線男だとすると、それは何のためだ。外國の小説には、火星人が地球の人間を捕虜にし、その皮を剥いて自分がスツポリ被り、人間らしく假装して吾れ等の社會に紛れこんでくるのがあつた。しかしあの婦人の顔面は滅茶々々だつた筈だ。婦人に化けたとしても、あの顔をどうするのだ。顔をかくしてゐる婦人なんて印度や土耳其古なら知らぬこと、この日の本にありはしない。婦人の死骸の行方が判らない限りこの問題は解決がつかない。

それから熊岡警官が轢死婦人のハンドバッグから探し出したフィルムを焼く層だ。あれは一體何だ。あれが判明すると、婦人の死因は勿論、身許まで解ることだらう。

赤外線男に關係あるかどうかは二段として、この婦人の問題を解いて置くことは、あまり困難でもない。その上に、失踪した隅田梅子といふ婦人と轢死婦人とが同じ衣類所持品をもつてゐるといふ暗合、それから黒河内子爵夫人が、行方不明で、今も尙生死が知れぬが、あの少し前に、亂歩氏の「陰翳」のことを言ひ出したといふ事——よし、明日から、この方面を徹底的に調べてみよう。

帆村は、かう考へると、靜かに椅子から立ち上つて卓子の灰皿へ長くなつた白い葉巻の灰をポトンと落した。

そのとき卓上電話がデリ／＼と鳴つた。帆村はキラリと眼を輝かすと、電話機を取上げた。「帆村君を願ひます。」と性急な聲が聞えた。



「帆村は私ですが、貴方は？」

「ああ、帆村君。私です。捜査課長の大江山警部ですよ。」それは故幾野課長の後を襲った新進の警部だつた。

「大江山さんですか。また何かありましたか。」

「ええ、あつたどころぢやないです。唯今總監閣下が殺害されました。」

「ナニ總監閣下が……？ 本當ですか。」

「困つたことですが、本當です。」

「一體どうしたのです。どこでやられたのです。」

「今日は御案内したとほり、深山理學士の赤外線テレビジョン装置を、本廳の一室にとりつけたのです。それは警戒を充分にして、この装置で丹念に赤外線男を探しあてようといふのです。深山さんに白丘さんと、お二人に来て貰つて取付けました。實驗は午後三時から開始するつもりで、貴方にもお出で願ふやう申上げて置きましたが、先刻總監閣下が急に見たいと仰有るので到頭ご覽に入れちまつたのです。」

「そりや拙かつたですネ。」と帆村は腹立たしさうに云つた。

「私ども始めはお止めたのです。しかし閣下は他出される約束があつて、その日の三時にはご覽になれないのです。それで強ひてといふお話ですし、一方例の用意もありまして大丈夫だと思つたのです。」

例の用意といふのは、深山理學士と白丘ダリア嬢には秘密で、この室内の一隅に小さい赤外線發生燈を點じ、隠し穴を通じて隣室からこの室内を活動寫眞に撮る。つまり肉眼で見えぬ光線を室内に送つて置いて、室内の人々の動靜を赤外線映畫に收めてしまふ。斯うすれば、その中で怪し氣な行動をする者がフィルムの上に映つた筈だから、後で現像すればそれと判る——こんな仕掛けを豫め作つて置いたのである。しかし總監閣下が犠牲になられたのでは、何にもならない。本廳の連中の愚鈍さに、帆村は呆れる外なかつた。

「で、閣下がお入りになつてから、フィルムを廻したのですネ。」

「さうです。うまく撮つたつもりです。——だが閣下は殺害されました。兇器は針で、同じやうに延髓を刺しつらぬいてゐます。」

「現像は……」

「今やつてゐます。直ぐこれからおいで願ひたいのです。」

「ええ、參ります。」

帆村は憂鬱な返辭をした。

驅けつけてみると、本廳は上を下への大騒ぎだつた。殺される人に事缺いて、總監閣下が荷めの機會から非業の死を遂げたといふのだから、これは大變なことである。

「どうです。フィルムの現像は出來ましたか。」帆村は課長に會ふと、眞先に訊いた。



「出来たのですが……。」

「どうしたんです？」

「駄目でした。赤外線燈の前に、どういふものかドヤ／＼と人が立つて、肝心のところは眞暗で、何にも寫つてやしません。」

課長は、面目な氣に下俯いた。

「深山氏とダリア嬢は、調べましたか。」

「今度こそはといふのでよく調べました。身體検査も百二十パーセントにやりました。ダリア嬢も氣の毒でしたが、婦人警官に渡して少しひどいところまで、残る隈なく調べ、繙帯もすつかり取外させるし、眼鏡もとられて眼瞼もひつくりかへしてみるといふところまでやつたんですが、何の得るところもありません。」

「ダリア嬢の眼はどうです。」

「ます／＼ひどいやうですよ。左眼は永久に失明するかも知れません。右眼も充血がひどくなつてゐるさうです。」

「ダリア嬢は眼のわるい點でいゝとして、深山氏の行動に不審はなかつたんですか。」

「ところが深山氏は閣下にいる／＼と詳しく説明してゐた最中なのです。深山氏が喋つてゐるのに、閣下はウーンといつて仆れられたのです。深山氏を疑ふとなれば、喋つてゐながら手を動かして針を突き

立てるといふことになりませんが、これは實行の出来ないことですよ。」

「すると二人の嫌疑は晴れたのですか。」

「まあ、さうなりません。二人もこれに懲りて今後はどんなことがあつてもあの装置を働かす暗室内へは行かないと云つてゐますよ。」

「では犯人は一體誰なんです。」

「赤外線男——でせうナ。」

「課長さんは、赤外線男だといつて満足してゐられるんですか。」

「今となつては満足してゐます。昨日までは稍信じなかつたですが、今日といふ今日は、赤外線男の仕業と信じました。この上は、私どもの手で、あの装置を二十四時間ぶつ通しに運轉して、赤外線男を發見せずには置けません。」

「しかしレンズは室内を覗ませたがいゝですよ。あの室内に赤外線男がウロ／＼してゐるのではネ。」  
帆村は、課長の勇猛心に顔負けがして、ちよつと皮肉を飛ばした。

その次の朝のことだつた。

帆村莊六は早く起き出ると、どうした氣紛れか、洋服箆笥からニツカーと烏打帽子とを取り出して、



ゴルフでもやりさうな扮装になつた。  
しかし別にクラブ・バッグを引張り出すわけでもなく、細い節竹のステッキを軽く手にもつと、外へ飛び出した。忌はしい第一、第二の犠牲者を、昨日一昨日に送つたとは思へないほど、麗かな陽春の空だつた。

彼は先づ、警視廳の大きな石段をテク／＼登つていつた。

「どうです。何か見付かりましたか。」彼は捜査課長の不眠に脹ればつたくなつた顔を見ると、斯う聲をかけた。

「駄目です。」と課長は不機嫌に喚いてから、「だが、昨夜また犠牲が出たんです。今朝がた報せて來ました。」

「なに、又誰かやられたんですか。」

「かうなると、私は君まで輕蔑したくなるよ。」

「そりや、一體どうしたといふのです。」帆村は自分でもなにかハツと思ひあたることがあるらしく、激しく息を弾ませながら問ひかへした。

「淺草の石濱といふところで、昨夜の一時ごろ、男と女とが刺し殺された。方法は同じことです。女は岡見桃枝といふ女給で、男といふのが……」

「男といふのが？」

「深山理學士なんだッ。これで何にもかも判らなくなつてしまつた。」

課長は餘程口惜しいものと見えて、帆村の前も構はず、子供のやうな涙をポロ／＼滾した。

「さうですか。」帆村も涙を誘はれさうになつた。「ぢや貴方も深山理學士は大丈夫といひながら、一面では大いに疑つてゐたんですネ。」

「そりやさうだ。今となつて云つても仕方が無いが、ひよつとすると、赤外線男といふものは、深山理學士の創作ぢやないかと思つてゐた。」

「大いに同感ですな。」

「視えもせぬものを視えたといつて彼が騒いだと考へても筋道が立つ。——ところが其の本人が殺されてしまつたのだから、これはいよく大變なことになつた。」

「僕は兎に角、見に行つて來ます。あれは日本堤署の管内ですわ。」

課長は黙つて肯いた。

警察へ行つてみると、現場はまだそのまゝにしてあるといふことだつた。場所を教へて貰ふと、彼は直ぐ警察の門を飛び出した。

そこから、桃枝の家までは五丁ほどで、大した道程ではなかつた。彼は捷徑をして歩いてゆくつもりで、通りに出ると、直ぐ左に折れて、田中町の方へ足を向けた。震災前には、この邊は帆村の繩張りだつたが、今ではすっかり町並が一新してどこを歩いてゐるものやら見當がつかなかつた。どこから金を



見つけて来たかと思ふやうな堂々たる五階建のアパートなどが目の前にスツクと立つて、行く手を見えなくした。彼は忌々しうに舌打ちをして、太田中アパートにぶつかると、その横をすりぬけようとした。そしてハット氣がついた。

見ると、アパートの高い非常梯子に、近所の人らしいのが十四五人も載つて、何ごとか上と下とで喚きあつてゐるのだ。

「どうしたんです。」

帆村は道傍に立つてゐる人のよささうな内儀さんに訊ねた。

「なんですか、どうも氣味の悪い話なんでござんすよ。」と内儀さんは細い眉を顰めると、赤い裏のついた前垂を両手で顔の上へ持つていつた。「あのアパートの五階に人が死んでゐるんだつて云ひますよ。さういへば、このごろ、近所の方が、何だか莫迦に臭い」と云つてましたが、その死骸のせりなんですよ。まあ、いやだ。」

内儀さんは、ゲツゲイツと地面へ唾をはいた。

「ぢや、よつほど永く経つた死骸なんですよ。」

「さうなんださうですよ。開けてみると、押入れの中にそれがありましてネ、もう肉も皮も崩れちやつて、まあ大變なんですよ。着物を一枚着てゐるところから、女の、それも若いひとだつてえことが判つたつて云ひますよ。」

「ナニ、若い女の屍體？」帆村はドキンと胸を打たれた。さうだ、今日は探しに歩かうと思つてゐたあの女の屍體かも知れない。日數が経つてゐるところから云つても、これは見逃せないぞと、心の中で叫んだ。

「そこは、その女の人の借りてゐる室なんですか。」

「いえ、さうぢやないですよ。あそこは潮さんといふ若い學生さんが一人て借りてゐるんです。ところが潮さん、この頃すつと見えないうで……。」

「その潮さんといふのは、若しや背丈の大きい、さうだ、五尺七寸位もある人でせう。」

「よく知つてますね。」と内儀さんは、はだけた胸を掻き合はせながら云つた。「ちよいといふ男ですわヨ、ホツホツホ。」

帆村は苦笑した。

「あらッ、向うから潮さんが歸つてきちやつたわ。」

「えッ。」と帆村は駭いて、内儀さんの視線の彼方を見た。

「まあ大變顔色がわるいけれど、あの人に違ひない……。」

その言葉の終らないうちに、帆村は向うから飄々とやつてくる潮らしき人物の袂を抑へてゐた。

「潮君。」

「呀ッ。」



青年は帆村の手をヒラリと拂つて、とツと逃げ出した。帆村はもう死にも狂ひで、このコンパスの長い韋駄天を追駈けた。そして横丁を曲つたところで追付いて、遂に組打ちが始まつた。そのとき青年の懐中から、コロ／＼と平べつたい丸罐のやうなものが轉げ出て、溝の方へ動いていつた。

「ああ——それは……。」

と青年の腕が伸びようとするところを、帆村は懸命に抑へて、うまく自分の手の内に収めた。そこへバラ／＼と警官と刑事とが駈けつけたので、帆村は間違はれて二つ三つ蹴られ損をしただけで助かつた。彼が手に入れたものは一卷のフィルムだつた。それも十六ミリの小さいものだつた。

ああ、フィルムといへば、身許不明の轢死婦人のハンドバッグに、フィルムの焼け層があつたてはな

いか。

帆村は、深山理學士と情婦の桃枝との殺害場所を點検すると、大急ぎで日本堤署へ引かへした。その頃には、本廳からも豫審判事が駈けつけてゐたが、もう何事も觀念したものと見え、潮十吉といふ青年は、墓場から婦人の屍骸を掘りだして逃げたことを白狀してゐた。しかし婦人が何者であるか、彼との關係はどうなのであるかについては中々口を緘んで語らなかつた。フィルムのことは意外にも、深山理學士の室から奪つたものと告白したが、事務室から千二百圓の大金を盗んだことは極力否定した。あとは本廳で調べることにし、意氣昂然たる老判事は、潮十吉と帆村とを伴つて、警視廳へ引上げた。今朝の不機嫌をどこかへ落してしまつた大江山捜査課長の前に、帆村探偵は手に入れた一卷のフィルム

ムを置いて、いろいろと打合せをした。

「ぢや、午後の五時に、本廳の第四映畫檢閲室で試寫といふことにするんですね。」

「さう決めませう。ぢや萬事よろしく。」捜査課長は、何が嬉しいのか、帆村の手をギュツと握つた。

帆村は一名の警官と連れ立つて、黒河内子爵を訊ねた。子爵の代りに、例の白丘ダリアが出て、子爵は重態で、看護婦が二人もついてゐる騒ぎだからと云つた。

「實は、失踪された子爵夫人のことに關し、是非ご覽願ひたい映畫の試寫があるのですが、それは困りましたネ。」と帆村は長くもない頷を指先でつまんだ。

「映畫ですか。あたし、代りに行きませうか。」

「さうですか。ぢや子爵の御諒解を得て來て下さい。よかつたら御一緒に参りませう。」

「えゝ、いくわ。」

ダリアは、まだ繻帯のとれぬ大きな頭を振り／＼奥に引きかへしたが、直ぐコートと帽子とを持つてあらはれた。

「さあ、お伴しますわ。」

三人が警視廳についたのは、すこし早やすぎた。



「ねえ、ダリアさん。まだ四十分もありますよ。」  
「退屈ですわネ。」

「ちよつと永いですネ。」と帆村は云つた。「さうく、この中に面白いものがありますよ。警官に射撃を訓練させるために、室内射的場がつくつてあります。僕たちが行つても構はないのです。行つてみませんか。」

「射的ですか？ あたし、これでも射撃は上手なのよ。」  
「ぢやいよ。行つてみませう。」

呑気千萬にも帆村は、ダリアを引張つて、警官の射的室へ連れて來た。そこは矢場のやうに細長い室だが、手前の方に、拳銃を並べてある高い臺があつて、遙か向うの壁には、大きな掛圖のやうなものがかつてゐた。その的といふのは、白い紙の上に、水珠を寄せたやうに、茶碗ほどの大きさの、青だの、赤だの、黄だの圓が、べた一面に描いてあつて、その上にとかとかいふ點數が記してあつた。

「僕やつてみませうか。」帆村は氣輕に拳銃をとつて、覗ひを定めると、ドーンと一發やつた。3點と書いた大きな赤圓に、小さい穴がプスリと明いた。

「どうです。相當なものでせう。」

さういひながら、彼は次から次へと、あまり點數の多くない色とりどりの圓を、撃ちぬいていつた。「今度は、ダリアさん、やつてごらんなさい。」帆村は拳銃を彼女の方に薦めた。

「エエ——」とダリアは答へたが「あたし、よすわ。」とハッキリ云つた。

「そんなことを云はないで、やつてごらんなさいな。」

「だつてあたし……あたし、眼が悪くて駄目なんですわ。」

さういつてダリアは、カラ／＼と男のやうな聲で笑つた。

まだ時間にあつたから、二人は食堂へ行つた。そこでオレンヂ・エードを注文して、麥菓の管でチュウチエウ吸つた。

「警視廳なんてところ、随分開けてんのネ。」ダリアは、帆村をすつかり友達扱ひにしてゐた。

「それはさうですよ。貴女みたいな方をお招きすることもありますのでネ。」

「だけど、このオレンヂ・エード、なんだか石鹼くさいのネ。あたし、よすッ。」

半分ばかり吸つたところで、ダリアは吸管を置いた。

そんなことをしてゐる裡に時間が経つて、警官がわざ／＼二人を探しに來た程だつた。

階段を地下へ降りて、長い廊下をグル／＼廻つてゆくと、大變天井の低い暗いところへ出た。例の赤外線男が出て來さうな氣勢だつたが、しかし仄暗いながら電燈がついてゐるから停電でもしない限り

先づ大丈夫だらう。

映畫檢閲用の試寫室は、思ひの外、廣かつた。壁は一樣にチヨコレイト色に塗つてあり、まるで講堂のやうな座席が並んでゐた。正面には二メートル平方位のスクリーンがあつた。



もう七八人の人が入つてゐた。雁金検事、中河判事、大江山捜査課長の顔も見えた。そこへ別の入口から、警官に護られて、潮十吉が手錠をガチャ／＼云はせながら入つて来て、最前列に席をとつた。そこは、帆村探偵と白丘ダリアとが並んでゐる丁度その横だつた。

「もうこれで皆さん全部お揃ひですか。」  
警官の映寫技師が、一番後方から聲をかけた。

「うん、揃つたぞ。もう始めて貰はうか。」

帆村のうしろにゐた捜査課長が聲をかけた。

「ぢや始めます。あれを演る前に、一つ調子をつけるために、實寫ものを一卷寫してみます。ウキーン  
の牢獄です。」

スクリーンの上へ、サツと白い光が躍ると、室内の電燈がバツと消された。一座はハツと緊張した。まづスクリーンの明るさで、室の中は暗闇だといふほどではないが、しかし椅子の下、後方の兩脇などには、小暗い蔭があつた。それにかうして平然と、畫面に見入つてゐるいゝものかしら、赤外線男の出てくるには屈強な地下室ではないか。

しかし一卷の映畫は、極めて短いものであつた。そしてまだ映畫がうつつてゐるのに、早くも電燈がバツと明るく室内を照らした。

「さあ、いよ／＼この次だ。」

「一體どんな映畫なのだらう。」

人々は胸のうちに、あれやこれやと想像をめぐらせた。

「私を外へ出して下さい。」潮十吉は隣りに遊んでゐる警官に訴へた。

「いや、ならん。」

警官の聲はあつかなかつた。

さあ、いよ／＼問題の映畫が寫し出されようとしてゐる。潮十吉が、深山理學士のところから奪つて來たフィルムはこれだ。そして身許不明の轢死婦人のハンドバッグの底に發見せられたのも、矢張り同じフィルムだつた。この映畫が寫し出されたが最後、意外なことが起るのではないか。既に靴の跡によつて嫌疑の深い潮十吉であるが、この一卷の映畫によつて、彼の正體が暴露するのではあるまいか。赤外線男は潮十吉か。或ひは赤外線の合棒でもあるか。

カタリと音がして、スクリーンの上に、青白い光芒が走つた。こんどは十六ミリであるから、畫面はスクリーンの真中に小さくうつつた。

「ああ、これは……。」

「ウム……。」

畫面の展開につれ、人々は苦しさに呻つた。誰かが、いやらしい咳拂ひをした。  
いまスクリーンに寫つてゐる畫面には二人の人物が出てゐる。



「ああ、こつちは、潮十吉だな。帆村は、あへぐやうに叫んだ。

「ああ、あれは伯母様ですわ。伯母様に違ひないわ。だけど、ホホ……まッ……。」

といつたきり、白丘ダリアは口を噤んだ。

さて画面に、それから如何なる情景が展開していつたか、その内容についてはここに記すことが許されぬ。しかしそれは密閉されたる室のうちで演じられてゐる怪しげなる戯れだつた。斯かる情景は人目のつかぬ眞夜中に行ふべきものだと思ふのに、それがまことに明るく光の下に於て行はれてゐる。そのいぶかしさは、尙も仔細に畫面を點検すれば、次第に明瞭だつた。それは赤外線撮影した活動寫眞であつたのだ。

恐らく場面は、眞夜中であつたらう。眞暗な室の中に、この場のことは演ぜられたのに違ひない。それにも保らず、この室にどこからか赤外線が當て、それを赤外線活動寫眞に撮影したのだつた。そして人物は子爵夫人黒河内京子と青年潮十吉！

さてこの呪ふべき撮影者は、一體誰であるか。

潮はこの映畫の寫つてゐる間は、頭を下げ顔を掩うたまま、一度も首をあげようとはしなかつた。映畫が終つて、一座の深い溜息と共に、パツと電灯がついた。

「潮」大江山課長は聲をかけた。「この撮影者は誰か。」

「あいつです。青年はグツと首をもちあげた。『あいつです、深山繪彦——彼奴がやつたんです。子爵夫

人と僕とは間違つたことをしてゐました。深山は而も夫人に戀をしてゐたのです。彼奴は私達の深夜の室をひそかに窺つて暗黒の中にあの赤外線映畫をとつてしまつたんです。深山はそれをもつて可憐なる子爵夫人を幾度となく脅迫しました。一度は夫人があつた一端を奪つたのですが、それは焼いてしまひました。バツグの底にのこつてゐるフィルムは、あれだつたんです。鬼のやうな深山は、赤外線利用の技術を悪用して、それまでにも、人の寢室を密かに寫眞にとつては、打ち興じてゐたといふ痴漢です。しかし飽くまで夫人に未練をもつ彼は、夫人が意に従はないときはあの映畫を公開するといつて脅したのです。夫人は凡てを觀念し、たうとう新宿のプラットホームからとびこまれたのです。これも皆、深山の仕業です。夫人は身許のわかることを恐れて、いつもあのやうな服装を持つて居られました。あれは最も平凡な、世間にザラにある持ちものを集められたのです。いはば月並の衣類なり所持品です。それがうまく効を奏して隅田氏の娘と間違へられたのです。顔面の諸に碎けたのは、神も夫人の心根を哀れ給ひてのこととせう。僕は復讐を誓ひました。そして深山の室に闖入して、あのフィルムを奪回したのです。彼奴を探しましたが、どうしたものかベッドはあつても姿はありません。早くも風を喰らつて逃げてしまつた後だつたのです。それから僕は……。」

このとき白丘ダリアは、先刻から耐へてゐた尿意が、どうにももう持ちきれなくなつた。その激しさは、いまだ経験したことが無い位だつた。彼女は慌て、試寫室を出ると、薄暗い廊下に飛び出した。見ると、直ぐ間近かに、赤い灯火が點つてゐて、それに『便所』といふ文字が讀めた。



彼女は、飛び立つ想ひで、その扉を押した。扉があくと、そこには清潔な便器が並んでゐる洋風廁  
だつた。ダリアはその一つに飛びこんで、バタリと戸を寄せると、氣持のよい程、充分に用を足した。  
大きい鏡があつたので、ダリアはそこで繻帯を氣にしながら、硫酸の焼け跡のある顔へ粉白粉を叩い  
た。そして入口の扉を押して、廊下に出た。その途端にダリアはハツと駭いて、  
「呀ッ。」

と聲をあげた。

そこには思ひがけなくも、帆村を始め、捜査課長、検事、判事など十四五人が、ダリアの方に身構へ  
をしてゐた。

「まア、どうしたんです。帆村さん。」

ダリアの救ひを求めた帆村は、最早、先刻、射的で遊んだ帆村とは別人のやうであつた。

「白丘ダリアさん。それは今大江山捜査課長から説明して下さるでせう。」

言下に大江山課長はヌツと前へ出た。

「白丘ダリア。いま汝を逮捕する。」

「あたしを逮捕するつて、冗談はよして下さい。」

「まだ白つばくれてゐるな。吾々の眼はもう胡魔化されんぞ。白丘ダリアが嫌ひだつたら、『赤外線男』  
として汝を捕縛する。それッ。」

ワツと喚めいて、選りぬきの腕に覺えのある刑事が、ダリアの上に折り重なつた。もう遁げる道もな  
ければ、方法もなかつた。

「赤外線男」は、それつきり自由を奪はれてしまつた。

事件が一段落ついた後の或る日、筆者は南伊豆の温泉場で、はからずも帆村探偵に巡りあつた。彼は  
丁度事件で疲れた頭腦を鳥渡やすめに來てゐたところだつた。仄かに硫黄の香の残つてゐる浴後の膚を  
懐しみながら、二人きりで冷いビールを酌み交はした。そのとき彼の口から、この事件の一切の顛末を  
聞くことが出來たのだつた。彼は中學校で同級だつたときのあの飾り氣のない口調で、こんな風に最後  
の解決を語つた。

「赤外線男」が白丘ダリアといつたんでは、警官の中にも本氣にしない人があつた位だよ。しかし要  
點を云ふとネ、元々『赤外線男』といふ名稱は、殺された深山理學士がつけたものなのだ。彼は『赤  
外線男』を見たといつて、いろ／＼な話をしたが、本當は一度も見たわけぢやなかつたのだ。それは  
彼が便宜上拵へた創作的觀念であつて、實在ではなかつた。

何故そんなことをやつたかといふと、始めはあの新説で世間を呀ツと云はせて虚名を博しよう位のと  
ころだつたらしいが、いよくといふときには事務室の金庫から彼が消費こんだ大金の穴埋めに、『赤外



線男』を利用したわけだつた。研究室が潮に襲はれると、逸早く彼は避難したのだつたが、そのチャンスを巧くとらへて、潮のかへつた後の自室や事務室を散々自分で破壊してあるき、自ら變壓器の上にあがると、自分の身體を縛つたのだ。智恵のある人間には譯のないことだ。

しかしこの犯行の裏では三人の女が隠れてゐるんだ。さういふと不思議に思ふだらうが一人は情婦といふ評判の女給桃枝だ。この女には祕密に大分貢いだものらしい。金庫の金に手をかけたのも、この女のためだ。

もう一人の女は子爵夫人京子だ。これには潮が云つてたやうに色ばかりではなく、むしろ慾の方が多かったのだ。夫人と潮との祕交を赤外線映畫にうつしたのは、夫人に挑むことよりも莫大な金にしたかつたのだ。もし夫人が相當の金を出したとしたら、深山は事務室の金庫を破る必要もなく、「赤外線男」をひねり出す苦勞もしないで済んだことだらう。しかし京子夫人にそんな莫大の金の都合はつかなかつた。夫人は死を選んだのだ。

そこへ、もう一人の女性、白丘ダリアといふ女がいけなかつた。これは先天的に異常性を備へた人間だつた。左の眼と、右の眼と、視る物の色が大變違ふなんて、ほんの一つのあらはれだ。あの狝々のやうな大女は、自分と反對に眞珠のやうに小さい深山先生に食慾を感じてゐる／＼と咬かしたのだ。「赤外線男」も、ダリアから出たアイデアだつたかも知れない。

しかしダリアの使囀に乗つた理學士も、金庫の金を盗んだり、それからダリアの喜びさうもない情婦桃枝のことを手紙から知られると、すつかりダリアに祕密を握られてしまつた恰好になつた。其の後に來るもの——それを考へると彼は安閑としてゐられなかつた。そこで深山は、思ひ切つて、ダリアが同じ室に寢泊りしてゐるのを幸ひ、水素瓦斯を使つて睡つてゐる彼女を殺さうとしたが、水素乾燥用の硫酸の壘が爆發してダリアに目を醒まさされ、不成功に終つてしまつたのだ。

ダリアはこの事を勿論感づいた。しかしだネ、彼女は悪魔だけに賢明だつた。事を荒立てる代りに、一層深山の弱點を抑へて、徹底的にこれを牛耳つてしまふ考へだつた。ところがあの騒ぎによつて彼女の身體に大きな異變が起つた。それは飛んで來た硫酸に眼を犯され、右眼は大した損傷もなかつたが、左眼はまるで駄目になつた。結局右眼一つといふやうなことになつてしまつた。しかし左眼が潰れたところが異變といふのぢやない。左眼が潰れたために、残る一眼が急に機能が鋭くなつたんだ。左右の肺の一つが結核菌に侵されて駄目になると、のこりの一方の肺が代償として急に強くなり、一つで二つの肺の働きのするなどといふことは、醫學上よく聞くことだ。それと似て、ダリアは左眼の明を失ふと同時に、右眼の視力が急に異常な鋭敏さを増加した。元々ダリアの右眼は、左眼よりも物が赤く見るといつてゐたが、赤い光線を感じる神経が發達してゐたんだ。そんなわけだから、一眼になつて異常な視神經の發達により、普通の人には到底見えない赤外線までが、アリ／＼と彼女の網膜には映するやうになつたのだ。普通の人が暗闇と思ふところでも、ハッキリ視える。——この異常な感覺を自覺したときのダリアの狂喜ぶりは、大變なものだつたらう。しかしその狂喜は、同時に彼女の破滅を豫約したもので



あつた。ダリアは悪魔になりきつてしまった。殺人淫樂者といふ恐ろしい犯罪者に墜ちたのだ。そして赤外線が視えるといふことが、彼女を裏切つて秘密暴露の鍵にまでなつてしまった。それは後の話だがネ。

さういつて帆村は、何か恐ろしいことでも思ひ出したらしく、大きい溜息をつくとき、ビールを口にもつていつて、琥珀色の液體をグーッと呑み乾した。筆者は壘をとりあげると、靜かに酌いでやつた。「それからあの殺人騒ぎだ。暗闇の中に、次から次へと起る恐ろしい殺人事件。疑ひは一應もつてみて、眼のわるいお嬢さんに、そんな藝當が出来ようとは誰も思つてゐなかつた。一方「赤外線男」といふ「男」の觀念がすつかり普及してゐてお嬢さんに眼をつけることが阻害された。誰があの暗黒のなかで、選りに選つて非常に正確を要する延髓の眞中に鍼を刺しこむことが出来るだらうか。「赤外線男」といふ超人でなければ、到底想像し得られないことだつた。ダリア嬢は、然りその超人的視力をもつ「赤外線女」だつたんだ。これはあとで判つたことだけれど、彼女はあの銀鍼をシャープペンシルの軸の中に隠して持つてゐたのだつた。

これに對して僕の探偵力は、全く貧弱なものだつた。どう考へていつても。「赤外線男」といふ超人を肯定するより外に仕方がなくなるのだ。僕はそんな莫迦氣たことがと排斥してゐたのが、そもそ大間違ひではなかつたかと考へ直し、それからもう一度一切の整理をやり返へすと、始めてすこし事情が判つて來た。

「赤外線男」が殺人をやるやうになつたのは極く最近のことだ。以前に於ては「赤外線男」の呼び聲は高かつたにしろ、殺人事件はなかつた。そこに何物かがひそんでゐると氣が付いた僕は、殺人事件の發生が、ダリアの一眼失明を機會にして其の以後に連續して行はれたといふことを發見した。同時に探索の結果ダリアの兩眼の視力異常についても聞きこむことが出來た。よし、それならば、何としても化けの皮を剥いてみせるぞ。さういふ意氣ごみで、僕はダリアに近づくと、大變心安くなつた。折しも幸運なことに深山の寫した子爵夫人と潮との祕交の赤外線映畫が手に入つたので、そこにチャンスを探む計畫を樹てた。僕は手筈をきめて、ダリア嬢を警視廳に呼び出したわけだつた。

最初の計畫は、殘念ながら失敗に近かつた。それは廳内の警官射的場で、青赤黄いろとりどりの水珠のやうに圓い標的を二人で射つことだつた。僕はドン／＼氣輕に撃つて、彼女にも撃たせようとしたが、ダリアは早くも危険を悟つて拳銃をとりあげようとはしなかつた。若しあの場合、彼女も射撃を始めたとしたら、必ずのつびきならぬ證據が出来る筈だつた。それはあの色とりどりの圓い標的の間に残る白い餘白には、あの裏面から赤外線でも照明してゐる深山の別個の標的があつたのだ。彼女は赤外線も赤い色も判別する力はない。それは赤外線も、吾々が赤も識別できると同様、アリ／＼と眼に映るからだ。しかし彼女は危険を感じて、吾々の眼には見えない赤外線標的を撃つことから脱がれた。しかし射撃を拒んだといふことが、僕の豫想を大いに力づけて呉れる効能はあつた。

さて、最後のトリック——それには鬼才ダリア嬢も見事に引つ懸つてしまつた。それはすこし下卑た



赤外線男

話だ。けれども、あの便所の一件だ。例のフィルムに彼女は激しい尿意を催したのだ。それは勿論、すこし前に食堂で彼女が飲んだオレンジエードに、一服盛つてあつたといふわけだ。映畫が終るや否やダリア嬢は氣が氣でなく廊下へ飛び出した。もうこれ以上我慢をすると、女の身にとつて顔から火の出るやうな粗相を演ずることになる。彼女は極度に狼狽してゐたのだ。暗い廊下の向うを見る、嬉しやそこには『便所』と書いた赤い灯がついてゐる。彼女は扉を押して飛びこんだ。果してそこには奥深く便器が並んでゐた。彼女は用を足した。しかし茲に彼女は、とりかへしのつかない大失敗をしたのだ。

それは、この『便所』と書いた赤い灯は、普通の視力をもつた人間には、到底発見することの出来ない光だつたのだ。つまり赤外線燈で、『便所』といふ文字を照してゐたのだ。吾々のやうなものならば、その前を無造作に通るに過ぎずしてしまふ筈だつた。赤外線の見える女の悲しさに、ダリア嬢はついそのやうな灯の下をくぐつてしまつたのだ。その場の光景は豫て張番をさせて置いた監視員によつて、すつかり見とどけられてしまつた。たうとう異常な視力の持ち主は化の皮を剥がれてしまつたのだ。流石のダリア嬢もかうなつては策の施しやうもなく、たうとう一切を白状してしまつた。『赤外線男』——いや『赤外線女』の事件は、ざつとこんな風だつた。

昭和八年六月廿五日印刷  
昭和八年六月三十日發行

日本小説文庫 三〇七

赤外線男

(定價 金參拾錢)

檢 印



著 者 海 野 十 三  
發 行 者 東 京 市 日 本 橋 區 通 三 丁 目 八 番 地 和 田 利 彦  
印 刷 者 東 京 市 日 本 橋 區 通 三 丁 目 八 番 地 木 呂 子 斗 鬼 次  
印 刷 所 東 京 市 神 田 區 鎌 倉 町 五 番 地 東 陽 印 刷 所

發 行 所

東 京 ・ 日 本 橋 ・ 通 三 丁 目  
振 替 ・ 東 京 一 六 一 七 番

春 陽 堂

電 話 日 本 橋 五 一 ・ 六 四 一 ・ 三 七 八 八



日本小説文庫目錄

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		
星旗樓秘聞	半七捕物帳 2	半七捕物帳 1	淀君 後篇	淀君 前篇	第二の巖窟	紅蝙蝠 後篇	紅蝙蝠 前篇	井原西鶴	さんご笠	隠亡堀	闇に開く窓	關ヶ原	孤島の鬼	有憂華		
木村毅	岡本綺堂	岡本綺堂	三上於菟吉	三上於菟吉	白井喬二	長谷川伸	長谷川伸	武者小路實篤	子母澤寬	國枝史郎	里見稔	直木三十五	江戸川亂歩	菊池寛		
四五	二五	二五	四〇	四〇	二〇	三三	三三	二五	四四	三三	四〇	四〇	三六	四〇		
定價送料																
32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
右門捕物帖 3	右門捕物帖 2	右門捕物帖 1	虹の歌	錢形平次捕物控 1	愛人 後篇	愛人 前篇	陰獸	新選組物語	愛慾 後篇	愛慾 前篇	青眉 後篇	青眉 前篇	紗繪呪縛 後篇	紗繪呪縛 前篇	時唐のお吉	唐人お吉
佐々木味津三	佐々木味津三	佐々木味津三	長田幹彦	野村胡堂	細田民樹	細田民樹	江戸川亂歩	子母澤寬	矢田挿雲	矢田挿雲	久米正雄	久米正雄	土師清二	土師清二	十一谷義三郎	十一谷義三郎
三六	三六	三六	四〇	三三	四〇	四〇	二五	四四	三三	三三	三三	三三	四〇	四〇	三六	四〇

49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33
清水の次郎長前篇	南國太平記後篇	南國太平記中篇	南國太平記前篇	戸並長八郎後篇	戸並長八郎前篇	女殺延命院	草に祈る	戀愛黒點 後篇	戀愛黒點 前篇	愛憎の彼方後篇	愛憎の彼方前篇	仇討五十三次	銀河 後篇	銀河 前篇	笑の王国	沈鐘と佳人
村松梢風	直木三十五	直木三十五	直木三十五	長谷川伸	長谷川伸	土師清二	櫻井忠温	正木不如丘	正木不如丘	中村武羅夫	中村武羅夫	佐々木味津三	加藤武雄	加藤武雄	佐々木邦	白井喬二
三六	四〇	四〇	四〇	三六	三六	三六	二四	二四	三六	三六	三六	二五	三六	三六	三六	二四
66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50
祖國は何處へ 4	祖國は何處へ 3	祖國は何處へ 2	祖國は何處へ 1	人間 饑飢	浅草紅團	太陽!隣人!後篇	太陽!隣人!前篇	蜘蛛 男	蟲	敵討雜記帳後篇	敵討雜記帳前篇	右門捕物帖 4	菊一文 字	盲目の目撃者	蛭川博士	清水の次郎長後篇
白井喬二	白井喬二	白井喬二	白井喬二	村松梢風	川端康成	十一谷義三郎	十一谷義三郎	江戸川亂歩	江戸川亂歩	直木三十五	直木三十五	佐々木味津三	吉川英治	甲賀三郎	大下宇陀兒	村松梢風
四〇	四〇	四〇	四〇	三六	二四	三六	三六	四〇	二四	二四	三六	三六	四〇	三六	四〇	三六







181 180 179 178 177 176 175 174 173 172 171 170 169 168 167 166

診療簿餘白	三太郎	霧の中の曙	小市の民	神々の戯れ	丹那トンネル	ゴーストツブ	博士郎の怪事件	殺人曆 外三篇	假面の輪舞 外四篇	殺人狂想曲 外二篇	荒野の秘密	木賊の秋	祇園小唄 4	祇園小唄 3	祇園小唄 2
正木 不如丘	正木 不如丘	野村 愛正	吉屋 信子	佐藤 春夫	岩藤 雪夫	貴司 山治	濱尾 四郎	横溝 正史	佐々木 俊郎	水谷 準	甲賀 三郎	正木 不如丘	長田 幹彦	長田 幹彦	長田 幹彦
三六〇	四〇六	二四五	二四五	四六〇	四六〇	四六〇	三六〇	三六〇	二四五	二四五	二四五	二四五	三六〇	三六〇	三六〇

197 196 195 194 193 192 191 190 189 188 187 186 185 184 183 182

まぼろし峠前篇	無頼三代	銭形平次捕物控 3	銭形平次捕物控 2	死染血染 後篇	死染血染 前篇	女房を拾ふまで	口笛吹いて百萬兩	細君解放記	花嫁戯語	半處女	女可愛いや	刀をぬいて	ごぜう地獄	夫唱婦唱	愛は何所まで
佐々木味津三	子母澤 寛	野村 胡堂	野村 胡堂	直木 三十五	直木 三十五	細木原青起	和田 邦坊	寺尾 幸夫	中村 正常	丸木 砂土	和田 邦坊	岡本 一平	岡本 一平	寺尾 幸夫	寺尾 幸夫
四〇六	二〇四	三六〇	三六〇	三六五	三六五	二四五	四〇六	四〇六	三六五	三六〇	二四五	二四五	三六〇	三六〇	三六〇

149 148 147 146 145 144 143 142 141 140 139 138 137 136 135 134

緑衣の聖母後篇	緑衣の聖母前篇	女秘書	接吻市場 後篇	接吻市場 前篇	吉良家の人々	鳩笛を吹く女	かんく蟲は唄ふ	江戸城心中後篇	江戸城心中前篇	殺人 鬼後篇	殺人 鬼前篇	決闘介添人	恐怖の齒型	お傳地獄	青春行狀記後篇
長田 幹彦	長田 幹彦	丸木 砂土	邦枝 完二	邦枝 完二	森田 草平	吉屋 信子	吉川 英治	吉川 英治	吉川 英治	濱尾 四郎	濱尾 四郎	大下 宇陀兒	大下 宇陀兒	鈴木 泉三郎	直木 三十五
三六五	三六五	三六〇	三六五	三六五	三六〇	三六〇	三六五	三六五	三六五	三六五	三六五	二四五	四〇六	二四五	四〇六

165 164 163 162 161 160 159 158 157 156 155 154 153 152 151 150

祇園小唄 1	太陽のない街	支那	木曾路の鴉	近世侠客ばなし	銃 後	新編乃木將軍	山利旗江	螢草 後篇	螢草 前篇	生きとし生けるもの	心驕れる女後篇	心驕れる女前篇	安城家の兄弟後篇	安城家の兄弟中篇	安城家の兄弟前篇
長田 幹彦	徳永 直	前田河廣一郎	子母澤 寛	子母澤 寛	櫻井 忠温	櫻井 忠温	岸田 國士	久米 正雄	久米 正雄	山本 有三	佐藤 春夫	佐藤 春夫	里見 淳	里見 淳	里見 淳
三六〇	三六五	三六〇	二四五	三六〇	三六五	三六五	四〇六	三六五	三六五	三六〇	二四五	二四五	四〇六	三六五	三六五



49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33
清水の次郎長前篇	南國太平記後篇	南國太平記中篇	南國太平記前篇	戸並長八郎後篇	戸並長八郎前篇	女殺延命院	草に祈る	戀愛黒點 後篇	戀愛黒點 前篇	愛憎の彼方後篇	愛憎の彼方前篇	仇討五十三次	銀河 後篇	銀河 前篇	笑の王國	沈鐘と佳人
村松 梢風	直木 三十五	直木 三十五	直木 三十五	長谷川 伸	長谷川 伸	土師 清二	櫻井 忠温	正木 不如丘	正木 不如丘	中村 武羅夫	中村 武羅夫	佐々木味津三	加藤 武雄	加藤 武雄	佐々木 邦	白井 喬二
三五	四〇	四〇	四〇	三五	三五	三五	二〇	二五	三五	三五	三五	二五	三〇	三〇	三〇	二〇

66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50
祖國は何處へ4	祖國は何處へ3	祖國は何處へ2	祖國は何處へ1	人間 饑飢	浅草 紅團	太陽!隣人!後篇	太陽!隣人!前篇	蜘蛛 蛛 男	蟲	敵討雜記帳後篇	敵討雜記帳前篇	右門捕物帖 4	菊一文 字	盲目の目撃者	蛭川 博士	清水の次郎長後篇
白井 喬二	白井 喬二	白井 喬二	白井 喬二	村松 梢風	川端 康成	十一谷義三郎	十一谷義三郎	江戸川 亂歩	江戸川 亂歩	直木 三十五	直木 三十五	佐々木味津三	吉川 英治	甲賀 三郎	大下 宇陀兒	村松 梢風
四〇	四〇	四〇	四〇	三五	二五	三五	三五	四〇	二五	二五	二五	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇

213	212	211	210	209	208	207	206	205	204	203	202	201	200	199	198
不壊の白珠	新女性 鑑	傾ける大地	港の唄	妖魔の哄笑後篇	妖魔の哄笑前篇	無言 歌	二人用 寢臺	サラリマン講座	細君行状記	安中草三後篇	安中草三前篇	業平文治 後篇	業平文治 前篇	怪談牡丹燈籠	まほろし峠後篇
菊池 寛	菊池 寛	賀川 豊彦	長田 幹彦	甲賀 三郎	甲賀 三郎	岡田 三郎	中村 正常	辰野 九紫	辰野 九紫	三遊亭 圓朝	三遊亭 圓朝	三遊亭 圓朝	三遊亭 圓朝	邦枝 完二	佐々木味津三
三六	三六	四〇	四〇	二五	二五	三〇	近刊	近刊	四〇	三〇	三〇	二五	二五	四〇	四〇

229	228	227	226	225	224	223	222	221	220	219	218	217	216	215	214
陽に叛く者	押繪の奇蹟	電氣風呂の怪死事件	軍事探偵(明石將軍)	闇に蠢く	白魔	宙に浮く首	盲獣	魔術 師	疑問の黒棒	戀愛 曲 線	奇談クラブ3	奇談クラブ2	奇談クラブ1	處女刑 後篇	處女刑 前篇
村松 梢風	夢野 久作	海野 十三	白石 實三	江戸川 亂歩	大下 宇陀兒	大下 宇陀兒	江戸川 亂歩	江戸川 亂歩	小酒井 不木	小酒井 不木	野村 胡堂	野村 胡堂	野村 胡堂	群司 次郎正	群司 次郎正
二五	三五	三五	近刊	二五	三〇	三〇	二五	二五	三〇	三〇	四〇	三〇	三〇	三〇	三〇



117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101
近代異妖篇	青蛙堂鬼談	三浦老人昔話	風雲天満双紙	松平長七郎青春記	雪の渡り鳥	杏掛時次郎	相馬大作	朱面組傳奇後篇	朱面組傳奇前篇	續右門捕物帖2	續右門捕物帖1	掌の上の悪魔	珠の壺	痴人の愛	愛すればこそ	諸國捕物帳
岡本綺堂	岡本綺堂	岡本綺堂	佐々木味津三	下村悦夫	長谷川伸	長谷川伸	額田六福	下村悦夫	下村悦夫	佐々木味津三	佐々木味津三	龍膽寺雄	龍膽寺雄	谷崎潤一郎	谷崎潤一郎	額田六福
三六〇	三六〇	三六〇	四六〇	三六〇	三六〇	四五六	三六〇	四六〇	四六〇	三六〇	三六〇	四〇	二四〇	三三五	二四〇	四六〇

133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118
青春行狀記前篇	いたづら小僧日記	半七捕物帳11	半七捕物帳10	半七捕物帳9	東京行進曲	煙幕	心理試験	天草美少年録	饗宴後篇	饗宴前篇	東洲齋寫樂	大地に立つ後篇	大地に立つ前篇	古今探偵十話	探偵夜話
直木三十五	佐々木邦	岡本綺堂	岡本綺堂	岡本綺堂	菊池寛	櫻井忠温	江戸川亂歩	佐々木味津三	加藤武雄	加藤武雄	邦枝完二	野村愛正	野村愛正	岡本綺堂	岡本綺堂
四六〇	三六五	二五二	二五二	二五二	三六〇	四〇	三六〇	四六〇	三六五	三六五	三六〇	四四五	四四五	三六〇	三六〇

83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67
島原美少年録	逃げる旗本	投げ節彌之	英五郎ふたり	唐人船	旗本退屈男後篇	旗本退屈男前篇	西南戦争 後篇	西南戦争 前篇	侍ニツポン	日本癡(ハズレ)後篇	日本癡(ハズレ)前篇	半七捕物帳 4	半七捕物帳 3	祖國は何處へ7	祖國は何處へ6	祖國は何處へ5
木村毅	子母澤寛	子母澤寛	子母澤寛	平山蘆江	佐々木味津三	佐々木味津三	平山蘆江	平山蘆江	群司次郎正	群司次郎正	群司次郎正	岡本綺堂	岡本綺堂	白井喬二	白井喬二	白井喬二
三六〇	三四五	三四五	三四五	四五六	三四五	三四五	三五六	三五六	三六〇	三六〇	三六〇	二五二	二五二	四六〇	四六〇	四六〇

100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84
一刀流物語	忠臣蔵八景	白蔵鬼	神風時雨組	艶麗風土記後篇	艶麗風土記前篇	獵奇の果	清河八郎 後篇	清河八郎 前篇	日輪 後篇	日輪 前篇	半七捕物帳 8	半七捕物帳 7	一寸法師	黄金假面	半七捕物帳 6	半七捕物帳 5
本山萩舟	本山萩舟	三上於菟吉	佐々木味津三	小島政二郎	小島政二郎	江戸川亂歩	三上於菟吉	三上於菟吉	三上於菟吉	三上於菟吉	岡本綺堂	岡本綺堂	江戸川亂歩	江戸川亂歩	岡本綺堂	岡本綺堂
四〇	四〇	四六〇	三六五	三六六	三六六	三六〇	四六〇	四六〇	三六五	三六五	二五二	二五二	二五六	三六五	二五二	二五二



181 180 179 178 177 176 175 174 173 172 171 170 169 168 167 166

診療簿餘白	三太郎	霧の中の曙	小市の民	神々の戯れ	丹那トンネル	ゴーストツブ	博士郎の怪事件	殺人曆 外三篇	假面の輪舞外四篇	殺人狂想曲外二篇	荒野の秘密	木賊の秋	祇園小唄 4	祇園小唄 3	祇園小唄 2
正木 不如丘	正木 不如丘	野村 愛正	吉屋 信子	佐藤 春夫	岩藤 雪夫	貴司 山治	濱尾 四郎	横溝 正史	佐々木 俊郎	水谷 準	甲賀 三郎	正木 不如丘	長田 幹彦	長田 幹彦	長田 幹彦
三六〇	四六〇	二四五	二四五	四六〇	四六〇	四六〇	三六〇	三六〇	二四五	二六〇	二四五	二四五	三六〇	三六〇	三六〇

197 196 195 194 193 192 191 190 189 188 187 186 185 184 183 182

まぼろし峠前篇	無頼三代	銭形平次捕物控 3	銭形平次捕物控 2	死染血染 後篇	死染血染 前篇	女房を拾ふまで	口笛吹いて百萬兩	細君解放記	花嫁戯語	牛處女	女可愛いや	刀をぬいて	ごぜう地獄	夫唱婦唱	愛は何所まで
佐々木味津三	子母澤 寛	野村 胡堂	野村 胡堂	直木 三十五	直木 三十五	細木原青起	和田 邦坊	寺尾 幸夫	中村 正常	丸木 砂土	和田 邦坊	岡本 一平	岡本 一平	寺尾 幸夫	寺尾 幸夫
四六〇	二四〇	三六〇	三六〇	三六五	三六五	三四五	三六〇	四六〇	三六〇	三六〇	二四五	二四五	二四五	三六〇	三六〇

149 148 147 146 145 144 143 142 141 140 139 138 137 136 135 134

緑衣の聖母後篇	緑衣の聖母前篇	女秘書	接吻市場 後篇	接吻市場 前篇	吉良家の人々	鳩笛を吹く女	かんく蟲は唄ふ	江戸城心中後篇	江戸城心中前篇	殺人 鬼後篇	殺人 鬼前篇	決闘介添人	恐怖の齒型	お傳地獄	青春行状記後篇
長田 幹彦	長田 幹彦	丸木 砂土	邦枝 完二	邦枝 完二	森田 草平	吉屋 信子	吉川 英治	吉川 英治	吉川 英治	濱尾 四郎	濱尾 四郎	大下 宇陀兒	大下 宇陀兒	鈴木 泉三郎	直木 三十五
三六五	三六五	三六〇	三六五	三六五	三六〇	三六〇	三六五	三六五	三六五	三六五	三六五	二四五	四六〇	四四五	四六〇

165 164 163 162 161 160 159 158 157 156 155 154 153 152 151 150

祇園小唄 1	太陽のない街	支那	木曾路の鴉	近世侠客ばなし 後	銃	新編乃木將軍	由利旗江	螢草 後篇	螢草 前篇	生きとし生けるもの	心驕れる女後篇	心驕れる女前篇	安城家の兄弟後篇	安城家の兄弟中篇	安城家の兄弟前篇
長田 幹彦	徳永 直	前田河廣一郎	子母澤 寛	子母澤 寛	櫻井 忠温	櫻井 忠温	岸田 國士	久米 正雄	久米 正雄	山本 有三	佐藤 春夫	佐藤 春夫	里見 淳	里見 淳	里見 淳
三六〇	三六五	三六〇	二四五	三六〇	三六五	三六五	四六〇	三六五	三六五	三六〇	二四五	二四五	四六〇	四六〇	三六五



245 244 243 242 241 240 239 238 237 236 235 234 233 232 231 230

祖國は何處へ9	祖國は何處へ8	女性の切札	浪人しぐれ笠	神風連	今年竹後篇	今年竹前篇	モダンマダム行状記	大川端	時を歩む子等	彼女の道	漁夫	しかも彼等は行く	春秋編笠ぶし	牢獄の花嫁後篇	牢獄の花嫁前篇
白井喬二	白井喬二	畑耕一	子母澤寛	長田幹彦	里見葎	里見葎	浅原六朗	小山内薫	芹澤光治良	吉屋信子	藤澤恒夫	下村千秋	吉川英治	吉川英治	吉川英治
三〇四	三〇六	三〇六	三〇四	三〇五	三〇六	三〇六	三〇四	三〇六	三〇六	三〇四	三〇六	三〇六	三〇四	三〇四	三〇五

261 260 259 258 257 256 255 254 253 252 251 250 249 248 247 246

喬二捕物集1	肥料と花	大東京の屋根の下	黄色い窓後篇	黄色い窓前篇	人生ふらふ道中	吸血鬼	鳴門秘帖4	鳴門秘帖3	鳴門秘帖2	鳴門秘帖1	花骨牌	一騎打物語	銀猫金猫	結婚適齡記	異妖新編
白井喬二	北村小松	加藤武雄	細田民樹	細田民樹	和田邦坊	江戸川亂歩	吉川英治	吉川英治	吉川英治	吉川英治	湊邦三	鈴木彦次郎	村松梢風	寺尾幸夫	岡本綺堂
三〇六	二五五	三〇六	三〇四	三〇五	三〇四	三〇六	三〇六	三〇六	三〇六	三〇六	三〇四	三〇六	三〇四	三〇六	三〇六

213 212 211 210 209 208 207 206 205 204 203 202 201 200 199 198

不壊の白珠	新女性鑑	傾ける大地	港の唄	妖魔の哄笑後篇	妖魔の哄笑前篇	無言歌	二人用寢臺	サラリマン講座	細君行状記	安中草三後篇	安中草三前篇	業平文治遠流奇談	怪談牡丹燈籠	歌麿をめぐる女達	まぼろし峠後篇
菊池寛	菊池寛	賀川豊彦	長田幹彦	甲賀三郎	甲賀三郎	岡田三郎	中村正常	辰野九紫	辰野九紫	三遊亭圓朝	三遊亭圓朝	三遊亭圓朝	三遊亭圓朝	邦枝完二	佐々木味津三
三〇六	三〇六	三〇六	三〇四	三〇四	三〇四	三〇六	三〇六	三〇六	三〇六	三〇六	三〇六	三〇四	三〇四	三〇六	三〇六

229 228 227 226 225 224 223 222 221 220 219 218 217 216 215 214

陽に叛く者	押繪の奇蹟	電氣風呂の怪死事件	軍事探偵(明石將軍)	闇に蠢く魔	宙に浮く首	盲獣	魔術師	疑問の黒棒	戀愛曲線	奇談クラブ3	奇談クラブ2	奇談クラブ1	處女刑後篇	處女刑前篇
村松梢風	夢野久作	海野十三	白石實三	江戶川亂歩	大下宇陀兒	大下宇陀兒	江戸川亂歩	小酒井不木	小酒井不木	野村胡堂	野村胡堂	野村胡堂	群司次郎正	群司次郎正
三〇四	三〇三	三〇三	三〇三	三〇四	三〇六	三〇六	三〇六	三〇六	三〇四	三〇六	三〇六	三〇六	三〇六	三〇六



306 305 304 303 302 301 300 299 298 297 296 295 294 293

霞む峠ざんげ猿	子母澤寛	二四五
上州七人嵐	佐々木味津三	近刊
富士に立つ影1	白井喬二	近刊
富士に立つ影2	白井喬二	近刊
富士に立つ影3	白井喬二	近刊
富士に立つ影4	白井喬二	近刊
富士に立つ影5	白井喬二	近刊
富士に立つ影6	白井喬二	近刊
富士に立つ影7	白井喬二	近刊
富士に立つ影8	白井喬二	近刊
富士に立つ影9	白井喬二	近刊
富士に立つ影10	白井喬二	近刊
富士に立つ影11	白井喬二	近刊
清風莊事件	松本泰	近刊

277 276 275 274 273 272 271 269 268 267 266 265 264 263 262

伊豆の踊子	若きエルテルの笑ひ	二四〇
瓶詰地獄	冗談に殺す	三六〇
血白粉	一本刀土俵入	三六〇
慈悲心鳥	菊池寛	四六〇
新珠後篇	新珠前篇	四五〇
霧	爬虫館事件	四五〇
氷の涯	海野十三	四〇〇
灰人	夢野久作	三六〇
喬二捕物集3	大下宇陀兒	三六〇
喬二捕物集2	白井喬二	三六〇
川端康成	丸木砂土	三六五
長谷川伸	長谷川伸	三六〇
夢野久作	夢野久作	三六〇
夢野久作	夢野久作	三六〇
菊池寛	菊池寛	四五〇
長田幹彦	長田幹彦	四五〇
海野十三	海野十三	四五〇
夢野久作	夢野久作	四五〇
大下宇陀兒	大下宇陀兒	四五〇
白井喬二	白井喬二	四五〇
白井喬二	白井喬二	四五〇

292 291 290 289 288 287 286 285 284 283 282 281 280 279 278

昭和毒婦傳	三角寛	近刊
街に展く窓	林房雄	三六五
娘突進記	寺尾幸夫	三六五
江戸から東京へ1	矢田挿雲	三六五
江戸から東京へ2	矢田挿雲	三六五
江戸から東京へ3	矢田挿雲	三六五
江戸から東京へ4	矢田挿雲	三六五
江戸から東京へ5	矢田挿雲	三六五
江戸から東京へ6	矢田挿雲	三六五
二筋道	瀬戸英一	四六〇
研辰の討たれ	木村錦花	四六〇
港の日本娘	北林透馬	三六〇
狂へる薔薇	長田幹彦	近刊
眞珠夫人前篇	菊池寛	四五〇
眞珠夫人後篇	菊池寛	四五〇







